

リラクゼーション・ミュージック講座開設に寄せて

佐武 進・稲貝 祥子

1. はじめに

本学保育学科においては、昨年度末における音楽科の廃止に伴う音楽療法士の課程に換わる課程として、昨年度よりリラクゼーション・ミュージック講座の課程を創設した。本来昨年度本学の保育学科及び栄養健康学科の両学科に設けたホームヘルパー課程に合わせスタートの予定であったが諸般の事情で学生の受講募集は本年度にずれ込むこととなった。

「リラクゼーション・ミュージック」の表題については、その名が示す通り、癒し、安らぎ、くつろぎ等々これらの事は音楽全般が与える要素であるが、保育学科として、また併設するホームヘルパーの資格と考え合わせ童謡、歌謡曲（いわゆる懐メロ）、民謡、軍歌を取り上げることとする。

2. 童謡について

まず保育学科を称する柱としての童謡についてであるが、幼稚園、保育所等の実習現場を回って園長先生方からの「最近、保護者が歌を唄わなくなった」、また「古く懐かしい歌がどんどん消えてゆく」…これらのご意見を拝聴するに付け、養成校として如何に対処すべきか苦慮すべき問題である。

付属幼稚園のひとつを同じ敷地内に持ち保育現場を観察出来る立場から特に音楽、それを伴う体操（リズム）に関してはテレビ等マスメディアの影響を強く受ける関係もあり、「日々是れ新たなり」の感さえ受けるものである。

時代の流れに添うべくこれらの保育現場の動きもまた当然と言うべきものであろうが、その結果として前述の事象が起こって来ることもまた当然の帰結と言わざるを得ない。

先般、本学は文部科学省の視察を受けたものであるが、委員の方から「幼児期の一年は我々大人の十年にも匹敵する…保育者の養成には社会から請託を受けた責任の重さを痛感すべきだ…」このようなご指導を頂いた。

また併せて、この度の審議会の指針が如何に教科の内容に反映されているかとも…

この度の視察に先立ち、授業視察の進行予定はじめ学生達への受講態度等、怠り無く準備はした筈であったが、視察官が授業視察に教室に入られた時には、数名の学生が授業などそっちのけで堂々と伏せての熟睡状態…こんな経緯もあり、前段については言われるまでも無く、重々納得共感するも後段については、授業計画、授業内容に取り入れるよう充分配慮しているが、どのように素晴らしい内容の教科であってもそれを如何に聞かせるかこの事が重要であり、本学クラスの大学にあっては教科以前の問題として、健学の精神、理念たる「温雅、礼節」を兼ね備えた人間を育成することこそ当為の大命題である…と議論になった次第である。

(その後の視察の結果報告、総評には極めて当然と思われる本学学生の質の低下の指摘を頂くことと相成ったが…)

ここ最近の若者は特に基本的生活習慣・能力において、確実に10年遅れていると言われて久しいが、まさに平成元年の幼稚園教育要領、それに次ぐ保育指針の改定下の申し子とも言うべき、将来の保育者の卵としての本学学生の生態を見るに付け、学力の低下のみならずその傾向は一段と加速していると言わざるを得ない。

漢字を知らない、文章が書けない等の基本的学力はもとより、集中力、忍耐力、言葉遣い、立ち居振る舞い等の基本的生活習慣に関する常識等々、数え挙げれば切りが無い程の無い無いづくし…何より保育者として致命的と思われる事は、幼児期における情緒、情操感形成のひとつの原点とも言うべき、また文化の継承者たる保育者として必須とも思われる童謡も少し古い曲になると多くの者が知らない…この事に、過去10年間保育現場での実態が垣間見れるのではなかろうか。

訓えを伴った基本的な「昔話し」はどうなのであろうか。

確かに小中学校における音楽の授業での「唱歌は受ける者の興味をそそらない」と言われ続けてきたが、さて、歳月を経、省みて心に強く残るものはそれらの曲ではないのか？

前述の無い無尽くしの若者の激増の要因として、核家族化、共働き、少子化等の家庭環境や遊びを含む幼児を取り巻く生活環境の変化、経済的環境の変化など様々な要因が挙げられるであろう。

少なくとも家庭において、子どもと話す、遊ぶ、本を読み聞かせる、歌を唄い聴かせる等々の家族との触れ合いの時間が激減したことは想像に難くない。

「三つ子の魂百まで」と言われるように、それらの事が幼児期の情緒感等、人間形成に与える影響は計り知れないものがあると思われる。

若者に限ったことではないが、それらのことが著しく欠如した現代の風潮（更に加速）各階層の一人一人が猛省すべきものと考ええる。

経済環境の厳しさ、生活環境の変化から家庭にそれらのことを期待することが難しい今日こそ、家庭に代わり重要な幼児期を預かる保育現場、保育者各々が幼児期における情操・情緒感

等内面的精神面の育成について、それまで考えもしなかった小学校にみられる学級崩壊等、垂れ流しとも言うべく、今日の若者と接する現場の状況を直視し猛省すべきではなからうか。

前述の文部省科学省の視察団から指摘頂いた本学はじめ保育者養成校へ課せられた、社会からの要請による責任の重大さは、取りも直さず今日の保育現場へ課せられた責任の重大さでも有る…この事を強く認識すべきであろう。

保育現場は当然子どもの遊びの場であるべきであることは言うまでも無い事ではあるが併せて我慢、忍耐、思いやり、協力等将来の人間として社会の構成員としての内面的情緒感の育成の場であり、その日一日を楽しく遊ばせれば足るという託児所であってはならない筈のものであろう。

食事面においても戦後の肉中心の食生活が身体面の著しい成長と併行して病気、健康面の弊害、及び精神面の粗さ等が言われ、旧来の日本食の見直しが叫ばれている今日、音楽の面においても基本的には商業ベースに立脚したマスメディアからの受け売りによる、目先子ども達に人気のあるもの、喜ぶものの視点に偏った傾向を見直す必要があるのではなからうか。

かつてタレントのビートたけしさんの言った言葉「男の子はある日突然鰐になる」や「被護厚きは育たず」の言葉及び家康公の「我が子を駄目にしたくば、酒と女と美食を与えよ」…これらの言葉を保育者、保護者の一人一人が真しに咬みしめるべき時ではなからうか…とは言え、ここ数年の本学の卒業生を遡ってみても、保育者としてあるべき姿を理論的に理解し得たかどうかすら定かでは無い上、仮に総論理解していた者が居たとしても、前述の無い無い現象は今に始まったことでは無く、極論すれば、曲がりなりにも自動車の体はなして居ても、それを前にはかろうじて走らせられるがバックが出来ない、あるいは、その為のノウハウや部品が大幅に不足している…こんなところではなからうか。

このような現状を踏まえ、「温故知新」の言葉に習い日本の心の栄養剤とも言うべき幼児、保護者と祖父母の3代にわたる架け橋としての共通の童謡を取り上げることとする。前述した今日の若者の多くに見受けられる様々な風潮の要因は決してこれひとつと言うものでは無い、しかし一人一人が考えられる範囲、出来得る範囲で真剣に且つ早急に取り組むべき問題ではなからうか。

つぎに童謡に関するアンケート調査を行った。設問については、時間的な制約もあり、つぎのような簡単な設問とした。

◎次に挙げた15曲について答えて下さい。

曲名

- (1) よく知っている…唄える
- (2) 少し知っている…教わった事があり、おぼろげながら唄える。
- (3) 知らない

◎ (1) (2) の何らかに回答した人 (知っている と回答した人) に…

その唄を何処で (誰から) 教わりましたか (聴きましたか).

(1) 幼稚園・保育所 (2) 両親 (3) 祖父母 (4) その他 ()

123名中的人数

曲名	よく知っている	少し知っている	知らない	幼稚園 保育所	両親	祖父母	その他
1) 雨降りお月さん	3	2	118	0	1	2	2
2) 花かげ	0	11	112	0	2	4	5
3) 七つの子	14	108	1	13	10	21	78
4) からすのあかちゃん	1	4	118	0	2	0	3
5) シャボン玉	58	65	0	64	14	5	40
6) 肩たたき	0	108	15	26	23	2	57
7) ないしょ話	1	18	104	5	3	1	10
8) やさしいお母様	0	0	123	0	0	0	0
9) てるてる坊主	0	123	0	42	21	8	52
10) 金魚の昼寝	1	10	112	0	3	4	4
11) ゆりかごの歌	40	50	43	15	15	8	51
12) 子鹿のバンビ	1	15	107	1	1	0	13
13) かわいい魚屋さん	0	35	88	5	5	2	23
14) かもめの水平さん	14	89	20	17	13	8	65
15) りんごのひとりごと	0	8	115	0	3	3	2

童謡に関する調査結果は以上の通りですが、幼稚園教育要領改定以前の5年間、幼稚園の教諭として勤務した当時、保育者として当然知っているべき又語り継ぐべき日本の情緒、文化とも言うべき童謡が幼稚園、保育園の保育現場から如何に忘れられ消えつつあるのか一目瞭然の感があります。

一覧表に表れた数字 (パーセント) 以上にその感を強くしましたが考察することになります。

考察

まず良く知っている と答えた曲を挙げると

1. シャボン玉 58名 (47%)
2. ゆりかごの歌 40名 (32%)
3. 七つの子, かもめの水兵さん 14名 (11%)

以上であり、1位の「しゃぼん玉」でも半数に満たない。

更に「良く知っている」に「少し知っている」を加えた上位5曲では

1. しゃぼん玉	123名	(100%)
1. てるてる坊主	123名	(100%)
3. 七つの子	122名	(99%)
4. 肩たたき	108名	(87%)
5. かもめの水兵さん	103名	(84%)

以上のように飛躍的に数字は上がるのですが…「しゃぼん玉」を除いて殆どの曲は部分的しか覚えていないのが実情です。

例えば、「七つの子」の歌詞を「カラス何故鳴くの、カラスの勝手にしょ」ドリフターズが唄ったこの曲を正式の歌だと思っていた学生がいたことにはテレビ等の影響の大きさを改めて知り愕然とします。

同様に「てるてる坊主」、「肩たたき」についても曲の前半部分のみの曲と思っている学生が大部分でとても保育現場で「歌」の教材として取り上げられたとは思えません。

そこで角度を変えてこれまでの6曲について、保育現場とその他との比率を見てみると

	保育現場		その他	
しゃぼん玉	64	(52%)	59	(47%)
てるてる坊主	42	(34%)	81	(66%)
肩たたき	26	(24%)	82	(76%)
かもめの水兵さん	17	(16%)	86	(84%)
七つの子	13	(10%)	79	(90%)
ゆりかごの歌	6	(7%)	74	(93%)

この様に日本の感性、情緒感、文化の継承者としての保育現場の姿勢の希薄さが浮彫りになってきます。今日の若者の風潮と合わせて考える時、このままで良いのか考えさせられます。

共働き、核家族化で昔と幼児を取り巻く環境は大きく変わっています。家庭に代わって保育者、保育現場がその重大な責務を負っているのではないのでしょうか。

テレビと言えば「大きな古時計」「金太郎」や「浦島太郎」等の曲が保育現場からではなく、マスメディアからしか子ども達に浸透しないとすれば残念な事です。

私もこの中の「花かげ」については知らない曲でした。他の曲は知ってはいても幼稚園教諭

時代にすべて子ども達に与えた訳でもありませんが、色々な面からのそのような事の積み重ねが退職後10余年経た今日、日本の心・文化とも言うべき子ども達の心に育むべき、情緒感、情操感の欠落に大きな影響を与えたと感じています。

つい先日も公立幼稚園の園長を勤め退職された方とお話しする機会を得ましたが、幼稚園教育要領の改定当時、若い教諭の間では「楽になった」との声も聞かれ愕然としたこと、園長始め経験豊富な教員の間では、「これではいけない」と認識されていた事など、必死の思いを話して頂けました。

小学校ではどうなのかと思い調べたところ、「靴が為る」「てるてる坊主」は昭和45年に教科書から姿を消しています。昭和48年には「あめふり」、昭和51年には「むすんでひらいて」、昭和60年には「雪」「村の鍛冶屋」が同様になくなっています。そして平成3年には「めだかの学校」「こいのぼり（屋根より高いこいのぼ……）」「背くらべ」「とんぼのめがね」「月（出た出た月が……）」「どんぐりころころ」など多くの曲が消え去っています。

3～4年おきに改訂され、その度に古き良き歌が姿を消していくのは悲しい現実です。しかも現在小学校に通っている娘の話では、たとえ教科書に載っていても教師が授業で取り上げなければ子ども達の耳に触れることはないそうです。

また唱歌についてはどうでしょうか。言葉が難しい、古くさい、今の生活に合っていないということでこれもまた童謡と同じように学校で歌われなくなっているようです。

確かに難しい言葉が使われているので子どもたちは意味もよく理解できないまま歌詞を覚えるかもしれません。しかし大人になって歌詞と同じような風景に出会ったり、情景を思い浮かべることができるようになったとき「ああ、あの唄の意味はこうだったのか、この唄を唄った頃の自分はこんなことをしていたなあ」と思うことができるのです。もしこれらの唄を唄ったことがない、知らなかった、とすれば、大人になって想いを馳せることはできません。心の中の宝箱の中に入っている宝物の数はとても少ない……

先日観たNHKの番組「日本語歳時記 大希林」の中で、イラストレーターの山藤章二さんが「現代は流動食のように子どもレベルに噛み砕いて子どもが安心してあぐらをかいている文化を与えている。子どもには背伸びする感覚が必要。大人は大人の毅然とした文化があり、子どもはそれに憧れば自分で勉強し、五感を働かせ大人の感覚を察知するものだ。」という内容の話がされていました。まさに唱歌についてはこのことが当てはまると思いました。

歌にしろ、食物にしろ、遊びにしろ、子ども達に「うける」ことばかり優先して「心を育てる」ことを疎かにしている現代の風潮、このままで良いのか不安にかられます。

情感豊かな童謡、唱歌を知らずに育った子供たちは大人になったときに果たして心のより所になるものがあるのか？殺伐とした心の光景がそこに広がっているような気がしてなりません。それがここ数年頻繁に起こっている無差別殺人などの考えられないような酷い事件を引き起こ

す素因となっているのでは、とさえ思えます。

私が幼稚園に勤務していた当時、少なくとも私の幼稚園では古いものを大事にすると言う園長の方針も有り、童謡に限らず、子どもの情操、人格形成に必要と思われる昔話も素話しや紙芝居等を通じて取り入れ、わらべ歌についても遊びの中で取り入れるよう配慮したつもりでした。(伝承文化とも言うべき昔話やわらべ歌についても実習生より調査中です。)

勤務していた幼稚園に幾度か訪問した折り聞いた話では、教育要領改定後も園長の「何も変える必要は無い」と言う鶴の一声で何も変えて無いとは聞いていましたが、先日、実習生の視察で訪問した折り「近頃の保護者は歌を唄わんなー」と嘆いておられました。

2児の母親として家庭での私自身を振り返ってみると、歌を唄い聞かせたかと言う点についてはどうかと感じています。私自身家庭においては出来得る限り触れ合う時間を持つように努め、本の読み聞かせや寝物語やにはかなりの時間をさくように努めました。

歌にしる、本にしる、子どもとふれ合う時間は幼児期の人格形成には欠かせないものだと思います。

この度のリラクゼーションミュージック講座の開講に当たり、童謡の部の担当を拝命した関係もあり、家庭や車の中で童謡を聴き、また唄う機会が多くなりました。買い物や、送り迎いで子どもと一緒に聴く事も多く、「雨降りお月さん」「花かげ」の歌の影響から、「お母さん、今日の月は云々」と空を見上げることも多くなり、この歌に込められた情感などに付いても話し合うようになりました。

短い歌詞に秘められた様々の時代的背景、見事な迄に織り込まれた情感などを今を生きる者の一人として伝承する必要性を改めて実感いたしました。

例えば、

しゃぼん玉飛んだ、屋根まで飛んだ
屋根まで飛んで、壊れて消えた

しゃぼん玉消えた、飛ばずに消えた
生まれてすぐに、壊れて消えた
風風吹くな、しゃぼん玉飛ばそ

この様に歌われる「しゃぼん玉」に明るさの中に秘められた「はかなさ」「無情さ」をどのように伝えるのか、あるいは「七つの子」「からすの赤ちゃん」「靴が鳴る」に唄われる鳥は今日のような「嫌われもの」では決して無いはずですし、子どもの心から親しまれる友達であった筈です。

人間が生きるための自然破壊が愛すべき存在であった鳥を「嫌われもの」にしてしまった背

景、その他にも子どもを持つ親が必ずといいほど子どもからのプレゼントとして貰うと思う「お手伝い券」「肩たたき券」…これら親子の心のふれあいを歌った「肩たたき」の「お縁側には陽がいっぱい、真っ赤な芥子が笑っている…」この一節に込められた穏やかさ、長閑かさ…

ごく普通の家庭に見られた一般的な光景、これらを失わせたものはそれを悪用する人間であり、人の心の歪みなのではないでしょうか。

今日のせせこましい状況と照らし合わせ、子ども達の心の中にどのような形で育ませるのかとても重要な事だと思いますし、善悪の判断は大人次第で幼児こそ明確に出来るのではと思います。

幼稚園、保育所がその日一日楽しく遊ばせる託児所であってはならないと思いますし、小学校ですでに「いじめ」が見受けられる今日、現在の子供達を待ち受ける環境現実は今まで以上に過酷な厳しいものです。それらに対する備えの示唆も何らかの形で必要なのではないのでしょうか。

童話の世界も幼稚園等の劇で見られる様に決してみんな仲よしではありません。

一日楽しく過ごす、何があっても皆んな仲よし…その結果が「いじめ」の増大、及びもつかなかった小学校の学級崩壊、登校拒否の増大等、人を思いやる心の欠如、抵抗力、忍耐力の集中力等の欠如から来るその他諸々の弊害はこの10年の歴史の事実が示すとおりなのではないのでしょうか。

小学校における学級崩壊ひとつを取ってみても、それが小学校だけの責任とはとても思えません。

その外にも「角を矯めて牛を殺す」の言葉のようにちょっとした事を捉え、余りに大きな日本人の心、日本の文化が切り捨てられているのではないのでしょうか。

童謡を含め、日本音楽に関する専門的な知識に付いては、常日頃から佐武教授からご指導頂き、「日本の情感、情緒は民謡等にみられる日本音楽の施法と西洋音楽の終止法が結び付いた音楽にこそある」…そのことは私なりに理解をいたしておりましたがこれを機会に、この度、私の授業のBGMに実験的に「金魚の昼寝」を流してみましたところ、多くの学生から「何だか心が癒される」と言う感想を聞き、その思いを一段と強くいたしました。

その後も「子じかのバンビ」「あめふり」「かなりや」「りんごのひとりごと」等の曲を紹介し一緒に唄わせたところ、曲の美しさや情感に魅了されたようで、「映画のワンシーンを見ているようだ。」「悲しい歌詞なのにこんなにきれいな曲だなんて。」「私も雨降りの日はお母さんに迎えに来てもらいたいなあ。」などの感想を持ち、授業後も口ずさむ光景が見られました。

幼い頃にこのような音楽に触れる機会に欠けていたとすれば、2年間という短期間の学生生活の中で、それらを知らず知らずの内に身に付けさせるため、これからも折りにふれ、実践し

てみようと思っています。

そのことによって「どらえもん」のポケットのように歌にしろ、お話ししる思いのまま取り出せる保育者の育成を計ると共に、この10年間「お忘れ物」のエアーポケットに入ったかのような若い保育者や保護者にフィードバックさせればと願っています。

3. 歌謡曲（懐メロ）について

本学にホームヘルパー資格取得のコースを開講したこと保育実習Ⅲにおいて児童施設の不足から者の施設での実習及び男子学生を受け入れたことによりそれらの施設、老人ホーム等への就職も視野に入れ、入所者との時代を越えた心触れ会う共通の癒しの会話として捉えるとともに、11月何日かを漫画を文化として位置付ける為、「漫画の日」と定めたように百年の時空を超えて心を癒し歌い継がれている懐メロを日本の誇るべき文化として捉え、取り組むこととする。

この事については、老人施設に勤務する職員を通じて、かなり以前から老人ホームや病院等の施設で定期的にこれらの音楽が流されると言うこと、更に付け加えると職員始め余り唄わないと言うことも併せて聞き及んではいた。

この事を裏付けるように、今年の6月に近所の病院のデイケアサービスの係りの職員より、本学保育学科のリラクゼーションミュージックの情報を聞き付け依頼を受けた内容を簡単に紹介すると、「私どものデイケアサービスでは皆さんに人気の有ると思われるカラオケに力を入れ、新曲は勿論、懐メロについても6万曲を超えるソフトを取り揃えているが、職員と1、2名のデイサービス利用者が唄うだけで、殆どの参加者が唄わないし、他の事をしている、どうしたのでしょうか？」と言う主旨の相談であった。

私の方からの「どのような曲を唄われるのですか？」との質問に、暫く間があつて「お富さん、とか」…この職員自身、懐メロについてはまったくの白紙状態だったのだが…

「お富さん？…悪くは無けれど、チャンキキおけさ、など酒の席ならともかく、昼間っからではちょっとですね」これが私の回答であった。

後日訪問することを約した上で、「何か良い歌ありますか？」との質問に、取りあえず民謡であれば万人受けするであろうと「花笠音頭」のレッスンを1時間余りしたところ、これが大変好評であったとのことであった。

その上合いの手が入ることもお年寄りから教えて貰ったとのこと…何時も世話になる職員に何かを教える、このことも触れ合いを強めること以上に生甲斐を与える大きな要素ではあるまいか。

ともあれ、殆ど歌わないという情報に不安を覚えながらデイケアサービスに参加するに当た

り選出したしたメニュー（曲目）はおおよそ次のようなものである。

（時間1時間30分 簡単なコメントを添えたギターの弾き語りによるメドレー）

「波浮の港」「船頭小唄」「雨降りお月さん」「花かげ」「君恋し」「東京行進曲」「無情の夢」「酒は涙か溜め息か」「影を慕いて」「祇園小唄」「花言葉の唄」「サーカスの唄」「男の純情」「緑の地平線」「紅屋の娘」「タバコ屋の娘」「明治一代女」「湯島の白梅」「十三夜」「勘太郎月夜」「大利根月夜」「人生の並木路」「旅姿三人男」「別れのブルース」「湖畔の宿」「名月赤城山」「ああそれなのに」「旅の夜風」「きらめく星座」「愛国の花」「露営の歌」「暁に祈る」「同期の桜」「ズンドコ節」「戦友」「ほんとにご苦労さん」「若鷺の歌」「ラバウル小唄」「異国の丘」「帰り船」「岸壁の母」「東京だよおっかさん」「憧れのハワイ航路」「湯の町エレジー」「鐘の鳴る丘」「君の名は」「黒百合の歌」「悲しき口笛」「赤いランプの終列車」「娘船頭唄」「この世の花」「有楽町で逢いましょう」「船方さんよ」

概ねこのような大正から昭和30年代の初めにかけての曲目の内約40曲を選びだし原則としてメドレーで流したのであるが、最初の曲にいわゆる歌謡曲のはしりとも言われる「波浮の港」（昭和3年）を演奏したところ地元下関出身のオペラ歌手藤原義江さんが唄ったというだけでは無いようなほぼ全員の大合唱となり思い掛けぬ状況に安堵するとともに心から沸き上がるような感動を覚えたものである。

歌詞カードなど無いままに溜まっていた思いの丈を吐き出すかのようにまた、過ぎ去った日々を愛しみ、思いをはせるかのように唄われる様は私達が望んだ心の癒し、安らぎそのものであった。

「船頭小唄」（大正10年）「雨降りお月さん」と90有余年の時空を超えて、お年寄りの方々の脳裏に或は心に「野口雨情 中山晋平」以降の日本人の心、日本の文化が脈々と流れていることを強く感じた次第である。

「花かげ」（大村能章作詞 豊田義一作曲）についても「雨降りお月さん」同様に、月に託した今とは全く異なるであろう嫁入り前の哀しい心情…ご自身の思い出にダブらせて涙する方も見受けられた。

その他の40曲も一人一人の幼少期、青年時代ありはそれ以降の思い出に重ね合わせるかのような熱唱であった。

軍歌についても良きにつけ悪しきに付け、思い出が一潮のようで、「ワシは軍歌は好かん、唄わん」と言われる人もいらっしやったが、「50年ぶりに歌を唄った」という方がマイクを握り締め、5番までの全曲歌われた「露営の歌」は印象的であった。

更にはその後の歌謡史に大きな影響を与えたであろうと思われる古賀政男作曲のいわゆる古賀メロディーのはしりとも言えるべき「酒は涙か溜め息か」（この歌を唄った藤山一郎は現芸大停学騒動を起したが、以降多くの音大卒業者が歌謡界にデビューするきっかけとなった）

この歌については前奏からすべて口ずさまれ、強く心に焼き付いている様子が感じられた。

簡略な解説を加えた以外の曲についてもほぼ同様であり、メドレーを終えた後、まさにアルファー波全開の様子で、顔を紅潮させておられる様に、私達が忘れかけている生活の貧しさ、苦しさ、哀しさ等を体現したこれらの曲はお年寄りの心に輝く宝石の感を強くした。

飽食の時代の今日、その事は取りも直さず私達が何らかの形で後世に語り継ぐべき文化なのではあるまいか。

ある人は暗すぎる、重たい、しんき臭い等と言われるかも知れない、しかしこれらが日本の歩んできた歴史そのものであり、幼稚園、保育園の卒園式に見られる光景であるが…涙ぐむ母親を前に園児達は元気一杯、その中に1、2名の悲しげな園児…悲しみの感性は喜び楽しさの感性より高いものかと…

少なくとも悲しみの感性を理解し得ない者の喜びの感性などたかが知れたものなのではあるまいか。

4. デイケアサービスに参加して

私も童謡担当と言うことで病院のデイケアサービスに2回目から参加させて頂きましたが、職員の方から聞いていた話とはまったく違うお年寄りの皆さんの大合唱を聞き、涙が込み上げそうになり、3番目に予定されていた歌唱指導を兼ねた童謡、「雨降りお月さん」が唄えないのではと思われる程でした。

幸いなことに教授が順番を間違えたお陰で5番目になり事無きを得ましたが、心を揺さぶられるような感動を覚えました。

私自身30有余年振り返ってみて、歌謡曲、中でも懐メロについては全くと言って良い程無縁の存在でした。

佐武教授の簡単なコメントを付けた大正10年の「船頭小唄」、昭和3年の「波浮の港」と続く、野口雨情作詞、中山晋平作曲のメドレー…歌詞カードも無いのに大部分の人が唄い、ある人は酔い知れ浸るように目を閉じ聴き入る光景は言葉には表し難く、まさに参加した者にしか味わえない、理論を超え、何十年という時を超えた心ふれあう癒しの世界、安らぎの世界を眼のあたりにした思いでした。

童謡の部担当の私の担当する「雨降りお月さん」、「花かげ」も何十年と言う年月を超え懸命に唄われ、その後の名曲を紹介してのギター伴奏による40曲に及ぶメドレーにも

曲名を紹介された時点では「どんな曲だったかな?」と言いつつ、教授が一節を唄うと即座にそれに合わせて唄い始める光景は感動であり圧巻でした。

更に帰り際に私達の所に寄ってこられて顔を紅潮させながら「有難うございました、又来て

くださいネ」と言いながらの握手，心の触れ合い…その暖かさがとても印象的でした。これまでの私にとっては，まったく無頓着であった分野の音楽でのこの感動にリラクゼーションミュージックへの取り組みに心新たにしました次第です。

今思えば恥ずかしい事ですが私が演歌で唄える曲は職場での会で，どうしても何かと言われた時の為の「津軽海峡冬景色」（石川さゆり）ぐらいのものでした。

その気になって取り組もうとしたのは本年6月まさにリラクゼーションとも言える，声帯を傷め唄うことが出来なかった元本学音楽科の学科長（声楽）への佐武教授のワンフレーズごとの繰り返しの指導を昼休みの寝物語りに聴いて知らず知らずの内に覚えた「乱れ髪」（美空ひばり）からでした。

何度かのデイケアサービスに参加して得た感動と，本学のサークル「昭和の歌を唄う会」主催の「美空ひばり特集」などに参加して童謡と同じように短い詞の中に込められた様々な情感，時代の背など様々な事が理解できる感じがしています。

これまで聴くことすら無かった「美空ひばり」のCDを車で子どもと聴く内に私の子どもも抵抗無く聞き口ずさむ迄になりました。

その上3世代同居の我が家の夫の両親と一緒にカラオケを楽しむまでになり，今年4月退職した義父のストレス解消，ふれあいに寄る心に癒しに役立っているようです。

この事が童謡にしろ懐メロにしろ佐武教授の唄える3世代に亘る心の癒し，安らぎ，ふれ合いそのものであると体感しています。

〔注〕

- (1) 1，2，3は佐武が執筆し，2のうちのアンケート調査と4は稲貝が執筆した。

参考文献

- 1) 川崎 洋：大人のための教科書の歌，いそっぶ社，1998。